【講演記録】

本間喜一
－東亜同文書院大学・同大学呉羽分校・そして愛知大学－

愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー　藤田　佳久
（2016 年 2 月 21 日　愛知大学豊橋校舎）

はじめに

改めまして皆さん、こんにちは。藤田と申します。今日は本当に神野様のご挨拶を最初にいただけて大変ありがたいと思っております。戦後の愛知大学設立にあたって神野様ご一家も含め、豊橋財界の方々から愛知大学の設立に関しては本当に大きな力をいただきました。そういう点で先ほども川井学長が言われましたように、是非今回は神野様にご挨拶をいただきたいということで、ご無理承知でお願い致しまして今日の日を迎えることが出来ました。改めて私からもお礼を申し上げたいと思います。

私のタイトルは皆さん方のお手元にもございますように本間喜一先生を軸にして書院から呉羽分校、それから愛知大学というようなことでテーマを掲げさせていただきました。本間先生は愛知大学の設立者ということですでに定着しております。我々、東亜同文書院大学記念センターのほうも早稲田大学の大隈さんみたいなかたちで特別展示室として本間先生の一室を作っております。それに関しては当然の話であるわけですけれど、改めまして今回は従来あまり触れてこれなかった点も含めて、本間先生をこういう流れの中で位置付けてみたいと思っております。それに先立ちまして最初さっとスライドでイメージだけ作っていただければと思います。本間先生が左側です。本間先生は明治の半ばぐらいに山形県のこの辺り、玉庭村と言います。現在は川西町で米沢市の経済圏の中の場所です。山間地域の小さな盆地でお生まれになりました。その辺の話はまた後のほうでさせていただきます。

1. 書院史と閉校

直接関係するのは東亜同文書院でありますが、元々書院は中国側の内戦も含めて戦争で 2 度も焼けておりますが、これが 3 回目の校舎で、この時の約 20 年間が東亜同文書院の最盛期であります。大旅行もこの時に凄く花開いていき、研究成果も大いに生まれた。ところが第二次上海事変で国民政府軍の精鋭軍が攻めてきて、それに対応して第二次上海事変が起こるわけですけど。結局、国民政府軍が逃げていくさい、租界の外側に書院のキャンパスがありましたから、そこで建物が燃やされてしまったのです。我々にとっても悲劇ですが、それまでの校舎が非常に瀟洒でした。フランス租界の隣にありましたから、それに負けないような瀟洒な建物を作ったというわけです。その設計者は根津一先生のところの関係者です。書院の校舎が焼けてしまった後、さらに大きな総合大学になっていこうと夢がありましたけれど、戦時中ですぐ実現は難しく、とりあえずは隣にあった上海交通大学が重慶のほうへ移っていましたし、あるいはフランス租界に避難しておりました。そこが避難民の巣窟になっていました。だから、そこを当時は軍が支配していたり汪兆銘政権があっ

たりしましたから、そこの許可を得て上海交通大学を利用させてもらったわけです。これが最後の時までの 7 年間過ごした校舎であります。そういう意味で上海交通大学と我々との関係を元に戻そうということで、我々もこれまで努力し、郷土研究もしながらやってま

荒尾　精

近衛篤麿

根津　一

大内暢三

矢田七太郎

本間喜一

いりました。この構想を持ったのが画像の一番左上の荒尾精という方で、尾張藩の父が藩士でその息子。明治維新で東京へ出かけて行って、金物屋をやりますが、東京で武士の商法で失敗してしまう。その時に彼は才能を見込まれて近くの警察署の書生になったのです。当時は征韓論がありましたから、署での議論の中で、朝鮮、あるいはその背後の清国等を知るきっかけになっていったのです。真ん中の人物が近衛篤麿公です。この方は全て自前で勉強した方でありまして、東アジアの安定のためには政治的な問題ではなくて教育文化事業でやっていこうということで、清国側のトップの賛同を得て東亜同文書院のもとの南京同文書院をつくられたのですね。それが折からの義和団の乱で、南京も危ないというわけで、上海に逃げざるを得なくなって、そこで荒尾精が構想をしていた貿易実務のビジネススクールと合体して東亜同文書院が誕生するわけです。その院長になったのが荒尾精の一番の親友でありました根津一です。それから歴代の何人かの院長がおられました。大内暢三という方は東亜同文書院が大学へ昇格した時の最初の学長。その次に矢田七太郎という方ですね。この方は事務職の方でありました。そして、最後に本間喜一先生が、最後の 19 年、20 年、一番大変な時に学長になられたということであります。最後の年の昭和 20 年は、東シナ海が潜水艦攻撃で渡れませんでしたから、富山県の呉羽紡績、当時は飛行機を作らされていたのですけれど、その一角に分校としてキャンパスを移して内地から上海

へ行けなくなった学生達を収容してここで勉強させたのです。これが呉羽分校であります。今は富山市民芸術創造センターとして残っております。

2. 愛知大学の誕生

そして本学、愛知大学ですね。この施設は予備士官学校ですが、その元々は陸軍第 15 師団です。その後の場所へ設立されたということであります。先ほどからの写真は、神野信郎様からお話しがありましたように、神野新田の神野家で愛大創立関係者が色々談笑してる時の写真で、神野様ご本人がこの写真を撮られたとのことです。当時は写真というとカメラも少なく、なかなか普通ではなかったことですので非常に貴重な写真です。太田英一という愛大の先生は、呉羽校舎で頑張った 13 人のお一人です。この松坂先生という方は京城帝大から愛大へ着任された先生です。四方先生もそうです。松坂先生は後に名大の総長。四方先生は岐阜大学の学長になっておられます。この二人が先ほどもお話がありました神野太郎氏と三郎氏ですね。それから、となりに本間先生。この林先生は愛大の初代の学長ですね。こちらが小岩井先生と河合陸郎氏、この河合氏は少し後に豊橋市長をされますね。それから神谷先生、この方も呉羽キャンパスで非常に頑張った方であります。今言いましたように林先生、本間先生、小岩井先生、その後の脇坂先生。この辺りのところぐらいまで私の話をさせていただこうと思います。そして、大学が出来上がった当時の最盛期、今はちょっと考えられないですけど日本学術会議の立候補者が 5 人もいたという面白い新聞記事を見つけました。本間先生、小岩井先生、林要先生、それから森谷先生、秋葉先生ですね。そうそうたる人たちが愛知大学に集まって来られたということがお分かりいただけると思います。

ここから先はお配りしましたプリントをご覧なさって下さい。どういうアプローチをしたら本間先生に迫れるかを色々考えたのですが、少し新しい観点で見てみたいと思います。

3. 本間喜一論

「はじめに」とのは今お話ししたことでありまして、2 番目は「本間喜一論」というような展開ができないだろうかということです。そして順番にいきます。小池家から本間家。本間先生はご本名、小池さんという姓のお宅で生まれたのですね。養子として叔父さんの本間則忠さんというお宅のところへ養子に入った。当時は養子関係っていうのは非常に多かった時代であります。しかし、本間先生としてはそこで養子としての立場、つまり自由にならないというような雰囲気の中でその立場を自覚されて。この時に私がずっと後のことを見ていきますと、そういういわゆる下からの目線というものの感覚を持ったのではないだろうかと。そのためにお母さん、実母、実際の親への思いがどんどん強まっていって、お母様にも色々手紙を差し上げたりしていますね。常に自分の情報を伝えておられます。

その次が、生まれた玉庭村。ここは江戸と繋がっていた。実に面白いことですね。これは米沢藩の一角に玉庭村があったのですけれど、玉庭村なり米沢藩は前の会津にいた時の 30 万石が 20 万石に減らされてしまったので、その 10 万石の武士を本当なら首切らなくちゃいけないけれど、首切らずに収容したのですね。首を切らずに収容した人たちは周辺の山間部へ入って開拓をしたわけです。その開拓村の一つが玉庭村。だけど開拓だけではなくて、玉庭村の人は江戸の藩邸の江戸屋敷へ出ていくという義務があったわけですね。そこで江戸情報を繰り返し、繰り返し色々な人が行っては持ち帰って来たと。だから、単に玉

庭村の中だけで生活をしていたという狭い生活空間ではなく、江戸も含めた広い視点というものが早くから培われておったと。法律学者の我妻栄さん、今の国会図書館の大滝館長さんとか、そうそうたる方々がこの村の出身なのですね。養子先の則忠さんも武蔵大学をつくられた方であります。玉庭村は米沢藩の中でも山間地域の中では特筆すべき方々を生み出した村。だから、東京へ行くというのも感覚的には難しいことではなかったのではないかと思うのです。

そこで、3番目は上京で学ぶと。中学校からも東京へ移ってしまいます。ここで養父の下で育つわけですが、その育つ過程の中でこの養父が武蔵高校を藤原財団の支援で作ったのですね。本間先生はその時に学校の作り方を一緒に覚えたと。だから本間先生は愛知大学をつくる時には経営にも公式があると、よくおっしゃっていたのですね。その公式をいつも頭に入れたのはこの武蔵大学をつくる時の体験があったからだというふうに思います。

次に勉学に非常に励んだ。しかし、最初は普通の中学校へ行ったのですけれど、やっぱり玉庭村のご出身っていうことがあって東京勢には敵わなかった。中ぐらいの成績になってしまった。しかし、これではというわけで頑張られて最後のほうにはぐっと上がって、次の一高へ入った時はもうトップクラスになって東大の法学部へ入ったわけであります。卒業後、判事に就任します。この時に判事はやっぱり判決文を書かなくちゃいけない、裁判で。そうすると事情が分かれば分かるほど判決文も書けなくなっていってしまう。判例があるからそれを真似してコピペすればいいわけなのですけれど、多くの裁判判事にはそれをやっている雰囲気があったけれども、自分はどうも真面目に考えるとそうもいかないというわけで、何が正義なのかということにこの時から疑いを持った。その時の指導者が三淵さんですね。この下で色々なトレーニングを積まれた。三淵さんの教えは天下の王道を辿りなさいという教えであったと。それが身についたというわけです。その後、ドイツ留学をされて超インフレ時代の混乱社会の中で色々学業に励み生活もされました。その中で身につけたことが戦後上海から引き揚げる非常時に多くの知恵を駆使して愛知大学を生み出す一つの基盤になったということが考えられます。これまた後でお話します。

帰ってきてからもう一回、「正義とは何か」を考えるという点で、やっぱり研究者になりたいということで、最初は東京商大の付属の専門学校に入られた後、東京商大の教授になられたわけです。ここでの研究は商法の研究。私はよく分かりませんけど、有価証券の概念化ということをやられた。これは石井吉也元学長が、私は最後の本間先生の弟子であるというようなお話をよくされるので、一度講演をしてもらったことがあります。その時に石井先生も商法の教育を受けたということで、商法のお話ばっかりしていただいてたのですけれど、それはそれで面白かったのですけど。しかし、もう一つ、もっと他の分野でも活躍されたのですね。これは女性の地位の向上のための法律のあり方、正義のあり方。戦前は女性は投票権がありませんでした。色々な意味で権利の主張ができなくて泣き寝入りをしているというケースが多かった。女性であるがためにそうであるというのはおかしいのではないかということで、そのための研究もされたわけです。「法は正義のためにあるべきである」というのが本間先生の一つの大きな信念になっていったわけです。

そして法政大学も兼任されていた時、以前豊橋研究支援課におられた小林さんが独自で研究をされて、フェンシングを本間先生のお嬢さんであります殿岡晟子さんから寄贈していただいたものだから、その辺にまつわることで研究しますと日本最初のフェンシング部を法政大学の兼任の時に創設したこともわかりました。しかも戦前、幻の東京オリンピッ

ク、1940 年の時、このフェンシング種目を正式種目としてしまったと。凄い動きをされたわけであります。しかしその後、東京商大（今の一橋大学）で白票事件に巻き込まれます。これは助教授の教授昇格の審査時に白票がたくさん出た。これを助教授の人たちが執行部の追及というかたちで教授の人たちと対立してしまった。その背景には東大から出た学長を追い出そうという魂胆があったのだというようなことが巷に伝わっているわけではありますけれど。要するに、そこで長いこと決着がつかないため、正義と責任ということで学校を辞めるわけです。その後、文部省のお役人の斡旋で東亜同文書院へ赴任するということになるわけです。

レジュメの中に、棒線が引っ張ってありますけれども、それぞれのところで一番上のいくつかはパイオニア精神とバランス感覚というものがあると。その真ん中ぐらいには色々な変化が身の回りで起こるものをどう客観化するか。正義とは何かという中でそういう客観化、あるいは合理的な思考というものがはたして法学ではあり得るのかどうか。下のほうへいきますと、責任論ですね。そういうのを総括してまとめますと、一番右のほうで理性ある正義。正義は正義だけど理性がないと駄目だというわけですね。ベースは法哲学で、本間先生はやっぱり法哲学に一番関心を持たれたのですね。基本は正義論ですね。だから、愛知大学にも優れた法律学者が欲しいということを随分おっしゃっていた。そこにはそういう背景がやっぱりあったと思うのですね。

次に東亜同文書院大学時代でありますが、丁度大学へ書院が昇格したあくる年に書院に就任しますので、いかに教育と研究の質を上げるかというアカデミズムに取り組みます。この点に関しては、白票事件時に一緒にやった仲間の先生たちも呼んで集中講義をやったりして、レベルアップを図って学生から支持を受けています。中国への関心、国民党、共産党、農民の中で、農民の支持する組織がやっぱり一番力を持つだろうというような判断をしています。書院精神の継承については、荒尾精と根津一を先覚者として尊敬しているというようなことを書いております。

それから、矢田さんが辞められた後、学長に就任します。学長に就任した後、小岩井先生の採用をしますけれど、小岩井先生は当時、日本で共産党内での活躍をされ、その後転向して上海へ行っていたのですね。その方を採用したということに関してはどういうふうに解釈したかということでありますが、一つはバランス感覚とか、正義という点では小岩井先生も弱者擁護ということで正義への共鳴というのが大きかったのじゃないかと考えられます。それから敗戦の予感というのが早く、昭和 19 年にはもうありました。そこで貨幣を全部物に換えてしまう。ガソリンとか金の延べ棒とか、食料とかですね。もう東京の本部からお金が届かなくなってきます。自前ですべて経営し、教職員、学生を保障していく。

4. 呉羽分校の果たした役割

もう一つは富山県に呉羽分校を設置したこと。これはレジュメのうち、矢印の右のほうにあります。昭和 20 年、最後の学年はもう海を渡れなかったので呉羽分校で勉強しました。そこで頑張ったのが分校長の佐伯先生、太田先生とか神谷先生。この 3 人を中心に教員 13 人が毎日とは言わないですけど、いわゆる教授会というのを開いて、そこにありますような今後のあるべき学校の姿を議論し、まとめ、吉田茂外務大臣からの許可を得たわけです。敗戦で閉鎖された書院をもう一回復活したいと願い、そこに書いてありますように、新しい教育方針ですね。つまり科学精神を堅持して結局、日中戦争の反省とか、文化国家、平

和国家、カリキュラムの再編で実地教育、大旅行だと思いますが、こういうものはなくしてはならないと。それから復員学生と外地の学生を受け入れる。書院の伝統を継承する。軍探学校、スパイ学校というのは単なる風評に過ぎないという内容です。

トピックスとして、先ほど申しましたように、図書が東亜同文会から GHQ に接収される前に全部引き揚げることができたこと。これが愛知大学を作る時の基本的図書になったということであります。

いよいよ愛知大学を作るわけでありまして、その時に先ほどのような引き揚げ学生を中心に受け入れ、責任を感じつつ最後の学徒出陣で学生を戦場に追いやってしまった反省と、その彼らに勉強をさせてやりたいと。その次、横線が引いてありますが、5 月から 8 月ぐらいの 3 ヶ月という短期間に学校を作ってしまったというのは普通あり得ないことです。しかし、これはさきほどふれた呉羽分校で、すでにそういう議論があり、書類作成に太田先生がメインとなって、本間先生からやってきて欲しいと言われた文部省への申請書を作っておられます（別添資料№㊵）。そういうわけで、呉羽分校の方々の努力でもって書類作成への対応が一斉に進んでいったということだと思うのですね。これが非常に大きい。そして愛知大学の設立趣意書にはそこにありますように、先ほど神野様からお話がありましたように、豊橋という都市とか回収した図書、とか引揚げ学生、とか東京への距離、非常にラッキーな面がいくつもあったということであります。そして初代学長は慶應元塾長の林先生に譲って、自分は実質的な経営をバックで担当されたというわけですね。帰国後まもなく最高裁事務総長に引っ張られたりしますが、最高裁を新しく民主化してスタートさせた功績は大です。GHQ から愛大公館接収の依頼がありましたけれども、それも本間先生は GHQ と対等に議論をして接収を免れた。愛大事件に関しましても、警察官の嘘を見抜くというかたちで最後まで弁論をして解決する。

名大から愛大への要望があった件です。名大は文科系学部がありませんでしたから、新制大学の時に作ろうとしたが、その時に教員がいないから愛大を吸収したらどうだっていう議論が向こうからあったと。しかし愛大は全学の討論の結果、それを拒絶したわけで、書院からの伝統とか私学の良さが理由です。

昭和 24 年、新制大学がスタートします。ただし台北帝大、京城帝大からの先生方も来られまして全部ではないけれど、そういう先生方が新設文学部で講座制のスタイルを作り出していった。本間構想には農学、水産学、工学部、付属高校、色々な構想があったわけでありますが、山岳部の薬師岳遭難事件でご自分が辞任してしまったので、その後、突然帝王学をやっていない学長が次々と誕生し上手くいかなかったという大学側の揺れがあります。中日大辞典の編纂は海外からも好評で高い評価もありました。

まとめ

以上のことから言いますと、書院と愛大の関係は、法制上は大きくは異なります。書院に関しては外地にあった時は外務省管轄、戦後愛知大学は文部省の管轄です。形式上は別置になりますけども、実際的な運用、実質的な実現過程というのは書院を引き継ぐというかたちで、本間哲学がそのベースにあった。それぞれ丸印で色々な番号をうちましたけれど、後ろのほうに色々な資料を挙げておきました。色々な証言とか新聞記事とか生々しい資料を基に作らせていただきました。

主なポイントは、大きな番号で言いますと 3 と 5 ですね。書院時代と愛知大学の設立のところがあまりお伝えしませんでした。また、初めの生い立ちからの青年期ですかね。商科大時代の、本間先生が置かれた環境下で培われたものが 3 番目、あるいは 5 番目の中で逐一実現された。そういう方向でもってすべてのものを動かしてきたということがいえると思うのです。だから外地の先生を入れたということは、戦後引き揚げの時に 1 年間は外地にあった学生は自由にどこの大学でも行けたけれど、すぐ混乱を起こしてしまった。そこで愛知大学は当時の文部大臣が田中耕太郎という方でまさに本間先生の三羽烏のお一人でありまして、おそらく本間君が作るならというようなことがどこかに書いてありましたけれど、それで実現したというふうに思います。しかし GHQ がすぐ横やりを入れてきて、これは大陸に出ている新聞に、東亜同文書院が復活することは好ましくないみたいな記事があったということで、それはスパイ学校ではないかみたいな風評がわっと立ってしまって、それを見た GHQ が入ってきて非常に細かな調査をされます。例えば、本間先生も色々聞き取りなんかをされます。本間先生としては GHQ 側にはこれは書院のまさに再現ではないというかたちの対応の仕方を一生懸命した。そういう中に京城帝大とか台北帝大の先生方も引き入れた。書院の先生たちが愛大の入り口まで来ていたにもかかわらず、小竹文夫先生は、東洋史の優れた先生なのに、愛大へ入れなくなってしまった。しかし愛大としては、後の新聞記事を見ていただきますと、その先生にも新聞記事を書いてもらったりして愛大とつなげ、中国分析をやったりしております。そういうことで GHQ とか外地から来られた先生方をミックスするとかいうかたちから外側から見ると少し混乱してるような感じに見えますけど、基本線は本間路線ですね。それが貫徹してるというふうにいえるのではないかなということであります。

以上で終わりにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

付記

本講演録は、2016 年 2 月 21 日愛知大学豊橋校舎本館 5 階において開催された、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催のシンポジウム「海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相－東亜同文書院大学から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合－」での講演をまとめたものです。

【資料】

NO.1/6

（愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催2015年度シンポジウム）
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

2016. 2. 21.

「本間喜一ー東亜同文書院大学・同呉羽分校、そして愛知大学ー」

藤田佳久（愛知大学名誉教授・東亜同文書院大学記念センターフェロー）

1. はじめに ―なぜ本間喜一は愛知大学をつくれたのか―

2. その原点 …… 本間喜一論

(1) 小池家から本間家へ
- 養子としての立場の自覚 ……下から目線の感覚
- 実母、実親恩い
- 江戸とつながっていた王庭村の風土 …好奇心と関心の広がり

(2) 上京で学ぶ
- 中学から上京、・養父（忠則）が武蔵高校を創設
- 勉学に励む …中高、大 とともに上昇→東京帝大・法
- 判事就任 ……何が正義かに疑い
  三渕氏に学ぶ：天下の王道を
- ドイツ留学 …… 超インフレの混乱社会を体験
- 東京商大教授 …（商法研究、有価証券の概念化
  女性地位向上
  …… 法は正義のためにあるべき。
- （法政大学兼任）… 日本初 ゼンミング部創設
  幻のオリンピックの 正式練習化
- 白票事件 …… 正義と責任（辞任）
- 弁護士 …… 白票事件関係官僚から書院副・学長推薦される

バランス感覚と正義への共鳴 ⑨
貨幣や不動産を生活用品、ガソリン、金へ換える ⑪
自前による自立経営へ …… 教職員、学生への保証

→ バランス感覚と
→ 変化の客観視
→ 理性ある正義とベースに法哲学
→ 責任論

3. 東亜同文書院「大学」時代
- 「大学」昇格とよりアカデミズムへの指向 …… 学生から支持 ③
- 中国への関心 …… 国民党、共産党、農民
- 書院精神の継承 …… 荒尾精と根津一、
- 学長に就任 …… 小岩井教授の採用 …… バランス感覚と正義への共鳴 ⑨
- 敗戦の予感 …… 貨幣や不動産を生活用品、ガソリン、金へ換える ⑪
  ↓
  自前による自立経営へ …… 教職員、学生への保証
- 呉羽分校設置 …敗戦、引揚げ後の内地立地への先手
- 校舎を国民党政権へ返還
  うち、華日辞典作成カード14万枚 ⑪
- 学籍簿、成績簿の持ち帰り（→愛知大学へ）……責任と書院継承

4. 呉羽分校での展開（活発な議論！）
- 規模：軍部・居留民の反対でスタッフ13人へ半減
- 伊藤忠兵衛（呉羽紡社長）のサポート
- 宵伯分校長による呉羽校舎存続陳情
  → 吉田茂外相が承認、復活！
- 内地での新校地調査 …… 福岡など
- 大学再編の議論 ㉘
- 新教育方針 ・科学精神を堅持し、時局への反省 ㉔ ㉗
  ・中国への正しい関心を養成
  ・文化国家、平和国家 の建設
- カリキュラムの再編と実地研究の重視
  ・書院こそが中国研究のトップ
- 本学の方針 …復員学生と外地学生受入れ ㉚
- 書院伝統の継承 ㉝ ㉑
  軍探学校は風評
  書院の中国研究は中国人も認めている。
  本学の使命は日中親善が使命
- トピックス …… 東亜同文会の図書をGHQが接収する前に確保した。㊱

（分校長：佐伯
教　員：太田、神谷ほか）
↓
（愛知）大学の設計図作成となった。

5. 愛知大学設立
- 学徒出陣学生、引揚学生の受入れ責任。→ 新大学構想 ②
- 短時間での大学設立準備と認可（1946.11.15）
  豊橋市と地元財界とのつながり ㊲ ⑮ ⑱
- 新生 愛知大学設立趣意書：国際人の養成、地域文化への貢献
  幸運な展開
  - 土地・建物は豊橋予備士官学校跡
  - 図書：GHQ接収を免れた東亜同文会図書
  - 学生：書院生を主に引揚学生とあと内地学生
  - 教員：GHQの干渉をさけるため→京都・台北帝大など ㊴-1

  書類作成は太田氏一人 ㊵
- 初代学長は元慶応大塾長、東亜同文会理事 林毅陸をくどく。㊻
  本間は実質経営担当：学長と理事長は統合（対立、混乱をさけるため）
- その間の後半 最高裁事務総長：新設 最高裁の民主化 …… 正義感
- GHQから愛大公館接収の動き→教育の場所論で対等議論 ⑯
- 愛大事件：侵入警察官の矛盾指摘、最後まで弁護、学生は三親等と…正義感 ㉙
- 名大からの愛大吸収合併案→全学討論で拒否、1本釣教員を嫌う
- 弁護士活動：漁民被害を弁護。
- 新制大学：新たに文学部 …旧帝大系教員らによる講座制
  さらに農学部、水産学部、工学部、付属高、構想も ⑫
  ↑書院に農工科、末期には総合大学化
- 第2代のあと第4代目学長 ⑫～⑯
  中日大辞典の刊行 …刊行に自費も投入→好評、中国へ5000冊寄付→次版へ
  薬師岳豊難：辞任 …責任 ⑰…しかし、後継者リーダーに遅れ

6. 書院から愛大へ
- 法形式上は別置　・実質は書院・本間哲学がベース

NO.2/6

〈本間喜一先生 御葬儀 時における〉

① 浜田学長の 式文

本日、かねてより一度目にしたいといっておられましたこの本学体育館に、愛知大学名誉学長故本間喜一先生の御霊を迎え、愛知大学大学葬をもって葬送の式を行うに当り謹んで式文を捧げ哀悼の意を表します。

先生は、明治二四年七月山形県にお生まれになり大正四年五月東京帝国大学法科大学を卒業され、直ちに司法官試補、ついで検事、判事に任ぜられた後大正九年四月東京商科大学付属商業専門部教授に任ぜられ、大正一一年六月より三年間英・米・独・仏の四ヵ国に留学され、「大正一五年二月には東京商科大学教授兼任となられました。その後昭和一二年一月に弁護士名簿登録をして第二東京弁護士会に所属されましたが、昭和一五年一一月東亜同文書院副院長ならびに東亜同文書院大学教授に委嘱されました。そして昭和一九年二月には東亜同文書院大学学長に委嘱され、昭和二〇年八月の終戦ならびに昭和二一年三月の東亜同文会解散によりその委嘱を解かれたのでありますが、終戦の後多数の学生と教職員・その家族の糧食を確保し帰国を実現するために奔走され、昭和二一年三月全員無事でしかも同文書院大学の全学籍簿を持参して帰国されたのであります。帰国後、先生は、新しい大学の創設に向けて教職員の中心となって率先尽瘁され、「世界平和ニ寄与スベキ日本人文ノ興隆ト有為ナル人材ノ養成」を目指しつつ、さらに、学問文化の大都市への偏重集積を排して地方分散を望む中部日本の要望に応え、国際的教養と視野をもった人材を育成しながら、あわせて引揚げ学生の収容をもはかることを目的として同年五月活動を開始し、同年一一月には旧大学令によって愛知大学設立の認可を得、翌二二年一月には予科、四月には学部を開設されるにいたったのであります。

先生は、後に第二回入学式の学長告示で、創立時の状況と意気ごみを次のように述べられました。「存在したのはただ知を愛するという無形ではあるが熱烈な真理探究心であった。その無形の紐で糾合された同志が相集って設立されたのが愛知大学である。教室は雨露をしのぐに足ればよい。机が足らなければそれもがまんしよう。真理探究に手をとり合って進むべき教師と学生さえあれば学校はできる。否作ってみせるという意気ごみでできたのが本学である」と。真理探究の精神のもと無からの大学づくりを始められたのであります。

先生は昭和二二年八月最高裁判所の初代長官三淵忠彦氏の懇請もだしがたく最高裁判所の初代事務総長に就任されましたが、やがて昭和二五年六月には本学に戻られ、愛知大学学長・愛知大学短期大学部学長に就任され、昭和三〇年一一月までの間第二代の学長として創設期から発展期への基盤固めをされました。この間昭和二七年五月の愛大事件に際しては、先生は、全学をあげて学問の自由と大学の自治を守るようにするとともに冷静に対処するよう学生の指導にも当られました。また、昭和三〇年四月華日辞典編纂処を設置され、先生の激励・援助によって昭和四三年中日大辞典は公刊され、その後昭和六一年刊行の中日大辞典増訂版へとつらなっていったのであります。さらに昭和三四年四月より昭和三八年四月まで第四代学長として財政の建て直し、女子短大の設置とその学科の増設、大学院博士課程の設置等、愛知大学発展のための基礎を確固たるものにされたのであります。昭和三八年一月薬師岳における一三人の山岳部学生遭難事件に際しては、先生は「人命は地球よりも重い」として財政負担をいとわない救助活動を指示されるとともに、事態処理の目途のついたところでその責を負って学長を辞任されたのであります。その後先生は同年六月愛知大学名誉学長に委嘱されましたが、その後も長い期間にわたって愛知大学の節目となるような重大な事項について貴重な意見や指示を寄せられ、愛知大学の充実・発展の路を決するのに甚大な貢献をなされたのであります。

先生の偉大な功績に対しましては、既に昭和四〇年四月勲二等瑞宝章が授けられていましたが、今回さらに正四位勲二等旭日重光章の叙位叙勲を下され、その偉功が称えられたのであります。

非常に残念にも本年五月九日午前五時四四分先生は肺炎のため幽明境を異にされました。九五歳の天寿を全うされたとはいえ、高潔な人格に広大な識見と深遠な洞察力を兼ねそなえられた大きな導きの星を失いましたことは、まことに哀惜の念を禁じえないものであります。しかしながら、私ども愛知大学教職員は、先生の心を心とし、先生の遺志を継いで愛知大学発展のために尽力いたす覚悟であります。どうか先生の御霊が安らかに眠られんことを、そして愛知大学を見守り導かれんことを、お祈りいたします。

昭和六二年六月七日

愛知大学大学葬
葬儀委員長
愛知大学学長　浜田　稔

---

②

昭和二十一（一九四六）年の愛知大学創立直前に、本間喜一が甥の小池信哉氏に宛てた手紙

前略　酷暑も何時の間にか打過ぎ秋風立ち申候
御無沙汰致し申し訳無之候　実ハ当方此夏に近来なき多忙にて疲れ申候　五月以来同文書院大学に代る大學を設立し學生教授達を救済致し度く校舎、寄附金等の工面致し候も何分封鎖預金財産税等にて募金に都合悪しく容易なるものに無之候　愛知縣豊橋市の豫備士官学校校舎借受け、全建物六千坪敷地四万坪此中に机、寝台、炊事場等全部備付けあり　尚自働車まで具備致候　新築すれば時價四千万円を要し申すべくに候　尚豊橋市その他より百五十万円寄附あり文部省に大学設立認可申請と財団法人設立認可申請中に候　恐らく来週中には許可を得る見込に候　小生は此度は教育面に出ず専ら財団理事として活動可仕候　当前団長官舎を学校へ提供される間小生の住宅にする積りに候　もし近く許可になれば十月には開校予科三ヶ學年を開き来年四月學部三ヶ学年を開き来年度を以て完成する予定教員は、全文書院教授と京城帝大法文学部教授十名台北帝大文政大学部教授数名其他を抜擢して法経学部を内容とする單科大学と致し申候　追テ文学部、農学部、水産専門部を設置致し度く将来大陸に志す者の中心人物を養成致し度く存じ候　いよいよ成立致し候わば、半分ハ豊橋に居住　半分ハ東京に住み申すべくあき子と妻ハ豊橋、忠彦と昌公は東京と言ふ風に暮し度く存じ申候　此夏ハ此の用事のため豊橋名古屋、東京を往復　此方面離れかね候　夏中　（中略）
結局道義に依って立つ事が大切に候　最後に幸福を来すものハ利己に非ず道義と確信仕候　小生の此度の大学設立の如き若し成功するとすれば決して金やなんかの御蔭に非ず専ら小生五十年ハ清貧に甘んじ正義の道を進んで来た跡を認められた結果と存じ申候　目先の小さな利益許り追かける者の到底なし遂げ得る所に無之候　早々拝眉を期し申し候
母上へよろしく御傳へ被下度く十月に忠彦
も妻も一緒に御邪魔する事に相成べくと存じ
申候　御益に出られなかった事残念に候も此度ハ
家内中皆で蔭詣り可致候　不一
九月二十日　本間喜一
信哉殿

No. 3/6

③ 東亜同文書院大学昇格（昭和十四年十二月）

◇東亜同文書院大学ニ昇格　東亜同文書院ハ十二月二十六日付を以て大学ニ昇格の御裁可ありたり。

◇東亜同文書院大学昇格記念式　一月五日上海東亜同文書院ニ於ては大学昇格記念祝典挙行に付き本会を代表して牧田主事参列し本会の祝辞を代読す。尚ほ当日理事長及び常務理事より祝電を出せり。

（出典：「支部」第三一巻第二号）

④ 東亜同文書院大学予科新入生入学（昭和十五年四月）

◇東亜同文書院大学予科新入生　本年度東亜同文書院大学予科自費入学志願者は一、二九名に達し、これ等は東京、福岡、上海の三箇所に於て試験を行ひたる結果六十四名に対し入学を許可せるが、一方本年度各府県選抜派遣生は一〇〇名に上れり。而して新入生合計一六四名は四月八日東京に集合し中内学生監引率東方資先生墓所を参拝の上十九日義山会館に於ける送衝会長の見式に臨み、二十一日夜東京駅発、途中伊勢大廟参拝、京都御所拝観、桃山御陵、横浜院墓所橿原神宮、畝傍御陵参拝の後、大阪に至り市内各所見学の上、二十六日神戸より龍田丸に乗船、上海に渡航入学せるが、本年度入学生及び招見式の詳細は次号に掲載す。

（出典：「支部」第三一巻第五号）

⑤ 東亜同文書院長の交代（昭和十五年九月）

◇東亜同文書院大学長兼同院長の交替　東亜同文書院大学長兼同院長大内暢三氏は病気保養の為め辞任せられ其の後任として本会常務理事矢田七太郎氏に委嘱せられたり。

◇新東亜同文書院大学長就任　新任矢田東亜同文書院大学長兼同院長は九月十五日東京駅発、同十七日長崎より連絡船にて赴任せられたり。

（出典：「支部」第三一巻第一〇号）

⑥ 本間喜一の書院赴任（昭和十五年十二月）

◇東亜同文書院副院長の赴任　元東京商科大学教授本間喜一氏は東亜同文書院副院長兼同大学教授を委嘱せられ十二月三日東京発赴任せり。

（出典：「支部」第三一巻第一号）

⑦ 東亜同文書院大学々部生募集（昭和十六年四月）

◇東亜同文書院大学々部生募集　東亜同文書院大学ニ於ては学部第一年の編入試験を施行せるが、其の受験科目中支那語を主として内地高等学校に於て之を履修せるもの少く、従つて応募者二十名に過ぎず、之に対し試験をなし厳選の結果六名を採用し、四月五日神戸発送入学せしめたり。

◇同予科生募集　近年各府県の公費留学生派遣は年を逐うて増加し本年は百四名に達せるが、私費入学志望者九百六十名中より厳重銓衡の上六十六名を採用し、合計百七十名に入学を許可せり。而して此等学生は四月八日東京に集合し、宮城拝礼後明治神宮、靖国神社参拝、新宿御苑拝観の上近衛義山公、荒尾精先生の墓参をなし、十一日本部に於ける招見式に臨み、近衛会長、阿部理事長ほか来賓並に本会理事の列席を受け（東亜通報二二〇号参照）同夜東京発伊勢大廟、橿原神宮、畝傍御陵参拝、京都御所拝観の後、十四日大阪に于て朝日、大阪毎日新聞社見学の上、同地選友同窓会の盛大なる歓送を受け九時三十五分大阪駅発、十六日長崎より乗船渡航せり。

（出典：「支部」第三二巻第五号）

⑧ 東亜同文書院専門部認可他（昭和十八年四月）

◇同文書院専門部　華北商工設立認可　本会に於ては前号所報の如く本年春より上海に東亜同文書院大学付属専門部及び北京に華北高等工業学校を新設せるが、右同校は四月二十七日付勅令第四百四号を以て天々設立認可せられたり。

⑨ 本間喜一東亜同文書院大学学長に就任（昭和十九年二月）

◇東亜同文書院大学学長決定　矢田学長は旧臘一身上の都合に依り辞職せられたるを以て近衛会長の手許に於て後任学長に付経験せられたる結果、前東亜同文書院大学学監兼教授本間喜一氏を最適任者なりと決定され、二月一日付を以て正式に左の如く発令された。

本　間　喜　一

東亜同文書院大学教授兼学長事務取扱

東亜同文書院大学学長を委嘱

⑩ 東亜同文書院昭和十九年度事業概況（自昭和十九年四月　至同　二十年三月）

一、本　部

イ、各学校入学試験

農工二大学試験ニ関シ戦時教育措置令ノ発布セラル・ヤ本会ハ逸早クカニ即応スベク資員分ヲ設ケ募集人員、試験時期、内容、採用等決定ノ時年前三ヶ月繰上ケ実施ニ踏切リ、新ケテ試験事務ハ四月二進捗シ四月初旬ニ応学生ハ下旬又ハ下旬又ハ長崎ニ集合次々北京及上海ノ現地ニ渡航スル段取リトナレリ

ロ、府県費及公費生

各県校学校ノ内中枢都市ヲナス府県費生ノ採用ハ従来ノ通リ医部トシテ各府県知事ノ総数ニ寡キヲ慮ト之レヲ官ヲスルコト、ナシガ新ケテ決定ヲ見タルモノ左ノ如シ

（大学予科）

専門部	五五名
北京工専	一四名
北京経専	三二名
計	五五名

ハ、私　費　生

我政府ノ戦時教育措置令ニ即シ第一次第二次試験ニヨリ厳重ナル銓衡ヲ経タル結果相二決定シタル人員数左ノ通リ

（大学予科）

専門部	一二八名
北京工専	一〇六名
北京経専	一四名
計	一八名
	四四六名

即チ本年度採定セル新募集ノ人員数ハ府県費公費生ヲ加ヘテ総数五五二名トナレリ

⑪ 東亜同文書院大学引揚前後事情報告書（昭和二十一年四月三十日）

報告者　学長　本間　喜一

一、終戦前ノ概況

A、一般上海ノ状況

昭和二十年二月小磯ノ閣議当時ハ戦局ノ進展ニ伴ヒ我軍ハ上海死守ヲ呼号シ兵力ヲ集中シ上海周辺ノ防備工事ヲ施行シ、更ニ市民ヲ召集入隊セシメ在郷軍人以外ノ男女邦人ヲモ保衛隊ニ編入、軍統制下ニ置キ、其ノ竹槍式武器ハ戦局ノ末期的症状ヲ示シタリ。

B、大学ノ校舎、器物等ニ就テ

大学校舎ハ既ニ各部隊ノ貨物厳及ビ通信部隊用兵舎トシテ西寮、工程館、南寮、文治堂ヲ使用シ居リ其後敵ハ昔部隊ノ本部トナリ敵ハ師団司令部、旅団司令部タリ学校本部、中院、興亜寮及ビ職員住宅ノ一部以外ハ全ク軍ノ使用スルコトロトナリ、時ニハ兵員五千名以上ヲ収容シタルコトアリ、校舎器物ノ損傷不鮮、一般軍紀ノ弛緩見ルニ堪ヘサルモノスラアリ、此等軍隊ハ学校器物ヲ使用セシ外、浦東地区、中心地区ノ部隊ヨリ器物ノ借用ヲ申込ミ、机、椅子、硝子等搬出セルモノ多シ。

尚本館城用トシテ旧書院陣コンクリート柱（二百数十本）並ニ立木等ヲ徴発的ニ密伐トシメラレタルモノ多シ。

大学ハ兵舎又ハ貨物廠トナリ居ルガメ爆撃ノ惧アリ学内住宅ヲ学外ニ転シ食料其他ノ物品ヲ学外ニ保管スル方法ヲ採リ、不要物資ヲ処分シ必要物資ヲ貯蔵スル等、種々体制ヲ準備セリ。

D、大学財政関係

一昨年以来物価騰貴的ニ騰貴シ昨年二比シ九月二千八二十倍以上ノ騰勢ニスル一方現物給与ヲ多クシタルモ上海ニ於ケル食糧給与ヲ免レス、兎ニ角生計ノミハ維持スヘク努力セルモ此間事務員ハ給与薄キタメ虹口地区ニ転職スルモノ多ク教職員ノ離又ハ子女ヲ雇員ニ採用シテ補充スル外無キ状態トナリキ。

大学ノ収入ハ四月以降内地カラノ送金無ク旧書院所体有郷始メ樹木、建具、硝子、地下水材其他不用物ヲ処分シ其代金ヲ以テ食料品、配給物ヲ購入シ価値保存ニ善務シタルコトハ二厚生課ノ功労ニ待セサルベカラズ。

最後ニ大使館同盟事官ノ強迫ニ依リ土地ヲ処分スルコト、シ、但産会社矢代氏ノ尽力ニ依リ六月二十三日約三分ノ一相ノ土地ヲ魅売シ（最低価格三十五本金条ノ相入）予約金条九本ヲ獲得シタルモ残額八十五本ハ担保決済等ノ難アリ土地司ニ名義書換手続中ニ終戦トナレリ。

学生寄宿費ハ逐次増加、昭和十九年末ハ八千元程度ノモノガ八月ニハ八万元、集中党当時即チ本年二月ニハ約三分ノ一相ノ土地ヲ魅売シ（最低価格三十五本金条ノ相入）予約金条九本ヲ獲得シタルモ残額八十五本ハ担保決済等ノ難アリ土地司ニ名義書換手続中ニ終戦トナレリ。

学生寄宿費ハ逐次増加、昭和十九年末ハ八千元程度ノモノガ八月ニハ八万元、集中党当時即チ本年二月ニハ約三分ノ一相ノ土地ヲ魅売シ（最低価格三十五本金条ノ相入）予約金条九本ヲ獲得シタルモ残額八十五本ハ担保決済等ノ難アリ土地司ニ名義書換手続中ニ終戦トナレリ。

物価ハ年々騰貴シ昭和十九年末ハ八千元程度ノモノガ八月ニハ八万元、集中党当時即チ本年二月ニハ約三分ノ一相ノ土地ヲ魅売シ（最低価格三十五本金条ノ相入）予約金条九本ヲ獲得シタルモ残額八十五本ハ担保決済等ノ難アリ土地司ニ名義書換手続中ニ終戦トナレリ。

前後シテ約三百名ノ復員者ヲ見ルニ及ビ学生寄宿費ハ復員者ヲ優先ス

尚ホ学生ハ懇談会ヲ行ヒ家族又ハ知人アルカ省ニシテ寄宿ヲ得ルモノニハ其処ニ寄宿スヘキコトヲ命ジ寄宿舎ニ留ルモノ百五十名内外ナリキ、（学校ハ財政上ノ制約アル二学生ハ何等ノ顧慮ナク傍校ノ軍隊ヨリノ支給米モ□ケセルモノ類ル少シ）

B、大学ノ移転

八月中在上海ノ交通大学ヨリ明後ニノ要求アリ早晩移転ノ必要アルモノト考ヘ学内教職員ハ自然科学研究所ヘ学生ハ佛租界第二小学ヘ転居ト決定生々殺菌ヲ開始シ、九月十日頃ニ完成シタルモ其後ノ事態発後ハコレ等ノ計画ヲ何レモ無駄ニセシメタリ。

九月十日頃、トナリ支那軍ヨリ命令ニテ邦人ハ全部虹口地区ニ集中スヘシトノ指示アリ且其ノ虹口地区ノ範囲ヲ明示セス、為ニ邦人ハ徒ニ推測ニヨリ移転ヲ行ヒ移転ノ都度財産、物資ノ搬輸神収ニ会ヒ捜索ヲクルモノアリ、本学ニ於テハ自然科学研究所ニ移転セル職員ハ家族四十数名ハ同所ニ於テ外部トノ交通ヲ遮断セラレ、第二小学校ハ九月二十日学生移転セラルコロ之ヲ中国軍ニ許サザル処トナリ物資ノ一半ヲ押収セラレ更ニ新アクアホテルニ保管セル米七千瓩、寝具其他貨物ニ被出禁止ノ厄ニ遇ヒ之等ノ損害ハ莫大ナルモ知何トモスベカラズ。

此間学生及教職員ノ帰身的努力ニ依リ北四川路電車会館弓道場ニ搬出セル物資ニテ辛ウジテ迄ノ生活ヲ維持シ得タルモノナリ。此等ノ物資ヲ価格ニスレバ尤ニ数億ニ上ルベシ、青年会館モ亦愛三広盛公学ノ明渡請求ニ会ヒ国却セルモ、日傷管理処ノ許可ニヨリ傷国還宅ヲ許サレ愁眉ヲ展キタリ。

G、大学ノ接収

学校ハ中国教育部ヨリ接収サレ、九月二十日頃引渡ヲ行ヒ爾後学校側ト立会ノ上正式接収ヲ行ヒ一月三十一日接収財産目録ニ調印ノ正式接収ヲ了セリ。

九月二十二日各人モ学校ヨリ最後ノ引上ヲナシタルタ刻重重要軍一千名ガ学校ニ入リ駐屯セリ。

接収評価国幣七億六千元（億億幣千五百億）ナルモ確定的ニハ中国側ノ決定ニ俟ツモノト思惟ス。

小職爾後大学接収後ノ指定陣ニハ中国側ノ決他ノ教職員ハ爆国スルコト、シ二月二十六日出帆港国ノ途ニツク。（以下略）

No.4/6

昭和34年5月15日 130

名実共に東海一に

施設拡充から内容充実を

愛大本間学長新方針を語る

愛知大學新聞

昭和19年(戦)5月5日

学長 責任と理性を強調

新制第三回入学式挙行される

理想社会に無関心は 社会の衰体のみち

新学長本間氏語る

愛知大學新聞

アンケート インキ

本間愛大学長 越し方を語る(上)

聞き手 対談 杉田本社社長

"オレは三河人だ"

横田市長が大見得きる

本間學長さん 御苦労さまでした

一問一答

本社々長 杉田有宰子

愛知大学々長 本間喜一氏

小岩井夫人

いつも長ければ恥多し

本間學長に感謝状

市政功労者の武士面会

本間先生回想録

名誉学長 本間喜一

明治二十四年七月一五日生（山形県出身）

愛知大學新聞

本間学長、おわびの手記

まだあきらめない

ご協力には感謝

『本間イズムと愛知大学』

(by 越知 專)

本間先生は「中和敬寧」という言葉が好きでした。これは中国の古典「中庸」に出てくる「中和を敬して天地位し、万事育す」という言葉から来ています。「右の意見も左の意見も、全てそれを敬して」みんなのためになるようにせよ」そういうのが本間さんの精神です。私はこれを本間イズムと呼んでいます。

この「中和敬寧」の精神が最も良く分かるのは、本間先生が第2代学長に就任して3年目に起きた愛知大学事件という「大学に自治を守る」運動での、本間先生の姿勢に見て取れると思います。

愛知大学事件

愛知大学事件とは、学生運動が活発であった愛知大学の様子をさぐりに来た警察官を、学生達が捕らえた事件です。明治憲法にはなかった「学問の自由を保障する」という規定がされて間もない頃でした。国家権力である警察官が独断で学内の様子を探りに来たことは、この憲法で保障された「学問の自由」に違反するのではないのか。大学には「大学の自治」というものがあり、自由に警察官は出入りできないという、多点で最高裁判所まで争われた事件です。

無実の女を強姦した2人の男に対し、ダニエルは質問をしたが、同じ答えを言う2人の嘘を見抜いて女性は救われます。

この物語を読む事件に当てはめて考えると、2人はどこかの部分で矛盾した供述をしたかもしれない。しかし当時2人を並べて調べたので2人の嘘で辻褄合せができてしまい、真相を明らかにすることを回避した。2人の証言は信用できないが、そして二つの証言が多数決で決まってしまったのである。

この不純学長の独裁によって、勅令官は警察官の保護の保障性に疑問を感じたのです。こうして一度罪決は結果されます。

本間学長の学生への愛情に代表されるような、人間尊重、人格重視の精神なのです。これは愛知大学が持つメンタリティーの一つと言いますか、愛知大学創成期といわれるこの時代に教授方や学生達で培いた伝統なのです。

『本間イズムと愛知大学』

(by 越知 專)

愛知大学

愛大創立の影の力——同文書院

釜井卓三

No.5/6

22

東亜同文書院呉羽校（昭和二十年九月～昭和二十一年四月）

東亜同文書院及び北京経済専門学校呉羽開校の件（昭和二十年九月）

東亜同文書院及び北京経済専門学校呉羽校ノ件

昭和廿年九月廿日

東京都麹町区霞ヶ関三ノ四

財団法人　東亜同文会

会長　公爵　近衛　文麿

外務大臣　吉田　茂　殿

東亜同文書院大学及北京経済専門学校内地開講ノ件

本会経営東亜同文書院大学及北京経済専門学校ハ、本年新ニ募入セル未渡航ノ新入学生約一八〇名ヲ主トシ、之レニ内地滞留者並ニ内地ニ於テ復員セルモノ等一二〇名ヲ加ヘ、総計約三百名程ノ在所属学校ニ復帰セシムベキ若ニ有之候ヘ共、現状ノ諸整ヲ為ス公側便宜実現困難ナリ、去レバトテ此等ノ学徒ヲ無為ニ過サシムルコトハ好マシカラザルニツキ、機ニ勤労動員ノタメ出動セル富山県傍負鉱業所羽村所在ノ興羽然窒株式会社ノ工場ヲ借受ケ之ニ収容シ、寄セ教員ノ内地ニアルモノニ十余名ヲ以テ不取敢来ル十月十五日ヨリ開講致度候間、御認可相成度度此段奉申請候。

（出典：厚生省戦争犠牲者援護局）

23

東亜同文書院呉羽校教務日誌（昭和二十年九月～十一月）

教務日誌（自昭和二〇年九月二八日至昭和二〇年一一月二〇日）

一、教授会記録

昭和二十年九月廿八日

出席者　斉伯　坂本　太田　広江　若江　石川　道上　桜川　浅野　池上

第一回教授会

議会　分校開校ノ可否ト在寮期間

経過、食糧事情及マ可令部ノ教育管理ナドヨリ本校開講ノ可否疑ゼラレ、食糧事情ヨリ開講ノ著シク困難ニシテコノ際休講ヲ持続スベシトノ見解モ表明セラレタルガ（コノ際ナレバコソ）仮令笹期間二終ハル恐レアリトシテモ、開講ノ上学生生徒ノ精神ノ安定ト指導ト二当ルベシトノ意見、大勢ヲ支配シテ、開講ニ決定セリ。

在寮教育ノ期間ハ、諸種ノ事情見透困難ナリヲ以テ一応一ケ月ニ決定ス。一ケ月間以内ナレバ、如何ニ食糧事情不利ナリト雖モ、現配給ノ継続スル限リ授業可能ナルベシトノ見解一致ス。

24

九月廿九日

出席者　前日ノ参加数ニ神谷一名ヲ加フ

第二回教授会

議題　教育方針ト寮生活指導方針

経過、大学トシテハ飽クマデ科学精神ヲ堅持シ、時局ニ対スル批判ト反省ヲ加味シテ、書院特続ノ女部ニ対スル正シキ関心ヲ養成スルヲ以テ教育方針トスベシトイフニ決定ス。

右方針実現ノタメ全学集団ヲ適当ノ時期ニ開クベシ。又上級学生ニハ実地研究ノ機会ヲ与フベシトノ提案、連続講義ヲ時期割編制方針トナスベキ提案、何レモ

25

十月一日　午後九時ヨリ

第三回教授会

議題　食糧事情ト、在寮期間ノ再検討

工場側炊事事情悪ク、学徒ヨリ食糧事情ハ必ラズシモ悲観スベカラズ。又彼等ノ協力ヲ確保センガタメニハ、少クトモ半ケ年位ノ開講ヲ望マントスル意見提出サレ、コレニ基イテ在寮期間ノ延長提案セラレタリ。

然ルニ事情ノ究明不充分ナ点指摘セラルルニ及ビ、在寮期間ヲ一ケ月ト定ム行フニ決定シテ解散ス。

26

十月十九日　午後一時ヨリ

出席者　斉伯　太田　石川　小幡　一円　今村

議題　同文会改組ニ伴フ対策

本日付年日新聞ニ同文会改組ノ記事見出サレタルニ国リ、斉伯学長代理急遽上京スルニ決定。学校側ノ態度ヲ明確ニスルタメ教授ヲ召集ス。

改組後ノ同文会ガ書院ノ存続ヲ認ムル場合ト然ラザル場合ニ分チテ考察シ、後者ニ対シテハ飽クマデ本校存続ノ意義強ク、現在スル分校ノ継続ニ依リ現在スル内地学生及外地学生ヲ盗ク抱究スル必要ヲ説キ、書院ニ対スル非難ハ、一般ニルコト。現地存続不可能、卒業生、活動分野ノ狭隘ノ下ニモ尚存続ノ意義アルコトヲ強調スルニ決ス。

前者ニ対シテハ、新理事会ヘノ本校幹部ノ参加、大学教育ニ理解アル新時代人ノ理事ヘノ選任ヲ要望スルコトモ、分校経営費、現地教職員（内地出張教職員）ニ対スル救済、戦災学生ノ教育費援助等ニ対スル善処ヲ、現地ニ送金スベカラシ

27

十月七日　午後五時半ヨリ

出講者　坂本　太田　若江　石川　道上　山口　持谷

議題　内地存続ノ場合ニ於ケル本学ノ特色並ニ開講改正ノ件

本学ノ特色　現在ノスタッフヨリ判断シ又、伝統ニ鑑ニテ支那研究ノ最高学府タルコト以外ニ本学ノ特色ヲ見出シ難シ、然レドモ終戦后ノ新事態ニ速応スルタメニハ、「人種ノ偏見」ノ拡張解釈ニ依リ支那ノ他モ実施セラル、ニ付キ、欧米、隣邦等ノ研究ヲモ取上ゲ、関ロヲ拡ゲル必要アリ、学校ノ現在ノ能力ヨリシテ当分ノ間ハ開ロヲ少シ拡ゲルニ止メ、米国法制ニナドヲ加フルコトヲ可トスベシ。

尚、右目的ヲ達成スル手段トシテ現地教育ヲ採リ消レルガ、本学ノ特色ノ一ツ最高学年ノ一、二年ノ中優秀ナルモノヲ中国又ハ米国ニ留学セシメルベキコト、（勿論、外交、機能、統治ソタル将来ニ於テ）等特色トシテ重明スルヲ可トスベキコトニ付テ教育ノ一致ヲ見タリ。

学則改正ノ件　奥学ノ要旨、立教綱領等ハ今名ニ表スベカラズ、価値ヲ喪失シタルヲ以テ。学則中、奥亜三ヶ、東亜三ヶ等ノ字句ハ従来モ形式的ナルモノニ止マリタルモ、今名ハ削除スベシ。学科目ニ付テモ全様ナリ。

尚、改正ノ件ニ付テハ詳述スレバ下ノ如シ。

28

十月二十日　午後七時ヨリ

出講者　坂本　太田　桜川　小幡　今村　持谷　道上　池上　斉藤　浅野

議題　学校当局ノ諮問題ニ付イテ

一、大学解散論　書院ノ使命ハ終ハッタト考フベキデ、コノ際、書院ノ過去ニ相応シイ最期ヲトルベキデアルトノ主張行ハル。無理ヲシテ自壊ノ道ヲ辿ル二優ルコトハナシ。

新出発ニ依ル方針ヲ明確ニ多キヲ期待サルト、イウニアリ。

尚、現地引揚教職員ノ救済資金ヲ確保スル緊要ニ於テ解体スベシトノ論モ出タリ。

何レニシテモ上記解散論ノ新意義ハ、書院財源ノ案外ニ、乏困ナル新事実発見

二、以下、募集停止論、研究所中心論、募金促進論

教授会と教職員会議と学校経営の意志決定機関とする論

研究部会兼論、などが議論された。

尚、専門学校ヘノ引下ゲノ提案ノ可否ハ、主部部分現地ニ在リ、返答遅延モ未ダ取レズ又、学部ノ学生ヲ抱ヘタル実状ニ鑑ミテ、後日議スベシトイフニ一致ス。

別ニ、同文会ニ対スル思惑ヨリ、コレヨリ独立ヲ強スベシトノ提案アリタルモ、子算手続、独立手続等面倒ナル問題アレバ、暫時現状ノ保権修スルニ決ス。

29

東亜同文書院内地開校の要望（昭和二十年十月）

昭和二十年十月二十九日

東亜同文書院大学分校学長代理　斉伯　守

財団法人東亜同文会長

公爵　近衛　文麿　殿

今般東亜同文会ノ改組断行サル、由仄聞致候ニ就テハ、東亜同文書院大学ノ意向ヲ伝達致シ之ガ具現ノ一日モ速カナランコトヲ期シ度ク、茲ニ記録五項目ノ覚書ヲ提出致シ御考慮ヲ相煩申上候。

覚書

本学ノ方針　現二分校ニ集合シツ、アル本年度新入生、内地復員学生（約三百名、明春五百余名トナル見込）ノ授業継続、将来大陸ニ引揚還スベキ外地新入生及復員学生ヲ温ク迎フベキ母校ノ存続ニ最モ重大ナル関心ヲ有ス。

二、改善処置

右ノ見地ヨリ分校ノ存続発展ニ飽クマデモ邁進努力スベク、今後ニ於ケル財政緊縮ノ為メニ府県費制度ノ変施ガ万一機性ニ供セラル、ガ如キコトアルモ、府県ニ代リテ広ク全国ヨリ優秀ナル善リ之ヲ給費トシテ教育スル二足ル資金ヲ此際確立シ置クベシ。従来満鉄ヲ初メ外地関係会社等ヨリ派遣セラレ居ル給費生、或ハ戦災ニ依リ父兄ヲ喪ヒ、或ハソノ家計ニテ弟妹育英ノ余裕ヲ失ヒタル私費生ニ救テモ亦同様ノ用意ナルベカラス。斯様ニ非常ノ時ニ際シテ特殊ノ使命ヲ負ヒ、及ビ困難ナル事情ノモトニ上海ニ在リテ将来帰航スベキ者ニ対シテ相応ノ方途ヲ確立シ置クコト緊要ナリ。

ソノ何レニセヨ国家ヨリノ補助金ニシテ当然本学ノ為メニ充当スベクシテ未ダ現地ニ送金サレズ従テ費用サレザル金額少カラザル今日、一応之ヲ学校経営ノ基金トシテ別途ニ確立シ置クコト緊要ナリ。

右ニ「一応」ト言ヒシハ、文化国家平和国家ノ建設ニ当リテハ、今後、本大学ノ如キ対シテ国家又ハ民間ヨリ一層ノ財政的援助アリテ然ルベシト考ヘラル、ニヨル。

30

31

32

三、理事選出ニ関スル要望

更ニ、新理事会（中枢機関）ニ対シテハ本学教職員ニシテ唯一人ノ理事モ選出シ居ラレザル今日、少クトモ一名ノ理事ノ内地在住教職員中ヨリ選任サルコト当然ナリトス。然モ、時代ノ新動向ニ応ゼン為メニハ別ニ若干名ノ本学ヨリノ参加者ヲモ理事ニ為ベキコトヲ要望ス。

更ニ、理事選出ニ関スル要望モ、ソノ論ノ当ラザルコト最モ甚シ。

33

四、本学存続ノ意義

本学ノ性格ニ関聯シテ新事態ニ即応スルタメニハ重ジク解消スベシトノ論モ一部ニ生ジツ、アルモ、ソノ論ノ当ラザルコト最モ甚シ。

或ハ軍隊学校視サレ或ハ日本帝国主義ノ大陸進出ニ人材ヲ供給シタルノ故ヲ以テ解消ヲ主張スル論者アリトセバ、吾人ハ反駁シテ曰ク、「日本ノ支配者ノ下ニ如何ナル機関ガソノ権力的利用ヲ免レ得ルカヤヲ逆問セザルベカラズ」軍学校視サレタルハ、本学ガ偶々大陸ニ存在セシ為メ右ノ利用ガ中国側ニ直接利用サレザリシ過ギズ。本学本来ノ使命ガ日華親協ニ在リ中国側ニ直接利用サレザリシニアリタルハ、本院卒業生ニ如ニ多有スル中国人ノ進ンデ認ムル所ナレバソノ事情ハ在華欧米系統、教育機関ノ一般ニ就キテモ略同様ナルコトヲ疑ベキ付言スル要モナカルベシ。

日本帝国主義ノ大陸進出ニ人材ヲ供給シタル訳ニ至リテハ、寧ロ内地大学ニソノ餌ヲ向クベキナリ。蓋シ書院ノ卒業生ハ政官界ノ官僚幹部ノ下ニ手足ヲ伸バシ能ハザリシ実状ニ在リタルコト周知ノ如シ。右ノ非難ニ反シテ、中国ノ愛スル若中国ヲ知ル者トシテ本学ニ於ケル対華工作ニ重大ナル役割ヲ果シ来リタル評論家ナドノ殆ド全部ガ書院出身者ナルコトハ大新聞社ノ東亜関係記者ノ陣容ヲ一瞥シテ明白ナルベシ。

最近ニ至リテモ支那事変以来本学ガ大陸ニ在リナガラ特ニ目隠シキ活動ヲナサザリシ事実ヲ以テ本学ノ無能無力ノ証左トシ進ンデ無用論ヲ唱フルガ如キ者アリトセバ、却テカヽル事実コソ本学ガ困難ナル事情ノ下ニアリトザラヒ、ニ学ト

トシテノ自由ナル活動ヲ可能ナル限リニ於テ堅持シ得タルト何ヨリノ証明ナリ

尚、本学ガ「自由主義ノ温床」トシテノ監視ヲ日本軍務当局ノ目ニ受ケ来リタルコトハ然シキ事実ナルト同時ニ、一般国民ニ、又中国人ニ特ニ理解ヲ追リタル事実ナリ。

No. 6/6

私の追憶

神谷龍男
法経学部教授（兼任）

（呉羽分校担当）

一　呉羽の思い出

昭和二十年五月、富山湾では「ほたるいか」のとれる頃、呉羽は青々とした緑にもえ、呉羽山は柔らかな緑でつつまれていた。そこに呉羽防衛があり、当時はまだ戦争中で、呉羽航空という航空隊があり、そこには、伊藤忠兵衛社長をして顧り、東亜同文書院の大先輩功力さんが副社長をしていた。そんな関係で、東亜同文書院大学予科生、専門部生（昭和二十年四月入学）を中心とした約四百名が学徒動員され、伊藤社長も暖をみては、よく学徒隊に話しかけられた。

これがB29による富山の大空襲であった（それは八月一日夜から二日午前〇時にかけてのこと）。なに街道といったか、北陸街道を越して、たんぼの畦道に逃れていた頃、その頭上を澄みわたる北陸の夜空にB29は編隊をつらねて、幸い、呉羽の工場はほとんど被害なく、一夜明くれば、また、三三五五と皆なが戻り、元気のよい学生達は、ほとんど全員一晩もしないで、爆撃をうけたばかりの戦災地々しい富山へ救援のためトラックで出掛けていった。今、同窓会の名簿をみると、そのときの予科、専門部の消息不明者が実に一四七名の多数にのぼっているのが目につく、どうしたことか。

いつぶが十二月となり、本部の東亜同文会がどうなっているか、行ってみようということになり、私、浅野さん（元愛知大学事務局長）その他、二、三名、その名前は思い出せないが、計四、五名で、昭和二十年十二月上旬から中旬にかけ、急ぐ気持で上京した。戦後間もなくのことで、引揚者でごった返す足の踏み場もない北陸線で。

そして、同文会では、二階広間の長椅子に、オーバーを着たまま、こう寝た。その頃、同文会は、すっかり人がいなくなってしまっており、豆閑、牧田理事一人がみえるだけくらいで、あとは庶務の佐藤さんと用務員一人といったらいであった。同文会に着いた最初の晩だと思う。冬のことで、もう暗かった。用務員の人が進駐軍の将校が来たといって知らせてきた。幸い、玄関入口は閉じていたので、裏口からアメリカ軍の将校はもってきており、英文の書類を渡していった。それが進駐軍による東亜同文会建物接収の書類であった。それをみると、椅子、テーブルなど移動してはいけないものが列挙してあった。なぜかブックス（bookcase）一本は除かれていた。それならば、書物は移動してよいと判断し、翌朝、牧田理事がみえるや、取り急ぎそのことを申し上げ、即日、同文会三階にあった霞山会の和漢洋の書書三万冊余りを書架共に三階よりおろし、トラックに積み込むまでのお手伝いを皆んなで協力した。人手のないときであり、一刻をあらそうときであったから、この苦しい労働は大変であったが、お役に立ったことだろう。

かくて、これらの書物は無事、成城の牧田理事の家に運ばれた。間と頃、進駐軍の接収命令は、同文会の向い側の満鉄東京支社にもあった筈で、そこにあった何十万冊かの書物については、その冊数が余りに多くて、手配する人と暇がなかったのだろうか、進駐軍に没収されてしまった。霞山会の三万余冊は右の次第で、没収されずにすんだが、あのときタイミングよく運び出していなかったら、やはり没収されていたことだろう。これらの書物は、後にといっても、早くも翌年、昭和一七一年、愛知大学設立の文部省への申請に、基礎的書物となったことだろう。

こうして、候補地についての運動をしている途上、名古屋駐屯の進駐軍情報部の知るところとなり、五月上旬頃だったと思うが、突然、大浜野営舎を通じて進駐軍からの出頭命令を受け、驚いた。その頃、日本は占領管理下で、進駐軍は絶対的で、日本政府の上に位していた。命令書の日と時間を間違えないようにして、広小路の納屋橋附近にあったと思うが、進駐軍のカマボコ兵舎を訪ねた。一般は寒風のことなどから調べられ、以後、一週間に一回位の割りで、計六、七回に及ぶ、延べ一か月命に応る取り調べを受けた。その間、東亜同文書院のことにも及んだ。同文書院が昭和七年（九三二年）の上海事変の際、時の大内兵衛三院長によって、あの情勢の上海から、事変勃発後直ぐ、学生教員を含む日本内地（長崎）への引き揚げを敢行したが、そのことは、当時の長崎の新聞にも出ている筈だとも話した。これは、取り調べのアメリカ軍将校の理解を深めたかもしれない。なお、繰り返えし、繰り返えし、尋ねられたことがあった。そして、最後に、総責任者は誰かときかれた。それは本間四郎先生であるといった。このようにして、進駐軍による、本間先生の出頭要請がなされ、このために、本間先生は名古屋へ来られた。この最後の取り調べは、先生と私と別々に行われ、これまでは、歩調が中断によって行われていたのが、この最後段階には両者によってなされた。それは初夏

そして今や、大学設置認可のための、文部省への申請書類の作成が急務となっていった。幸い、大学設置に必要な基本的図書は、進駐軍から貸し押さえを、まぬかれて、間一髪のところで運び出しに成功した霞山会所蔵の三万余冊があり、校地、校舎については、豊橋第一予備士官学校があり、それに、戦争の結果、解散となった東亜同文書院及び岡大学、京城帝大、台北帝大等の有力教授陣の参加が見込まれるにいたった。これら大学設置のための基本的諸条件がきわめて短期間のうちに整えられていったことは、新大学設立のためにこの上ない幸いであった。

その当時、愛知県下には、浜名古屋大学を含めた東海地方には、まぬかれて、間一髪のところで運び出しに成功した霞山会所蔵の三万余冊があり、校地、校舎については、豊橋第一予備士官学校があり、それに、戦争の結果、解散となった東亜同文書院及び岡大学、京城帝大、台北帝大等の有力教授陣の参加が見込まれるにいたった。これら大学設置のための基本的諸条件がきわめて短期間のうちに整えられていったことは、新大学設立のためにこの上ない幸いであった。

文部省への書類作成といっても、整備された事務があるのではなく、タイプ一台もないような状態で書類の作成であるかは想像もできないような状況の下での作業であった。本間先生の指示の下に、太田英一氏（元東亜同文書院教授）が当っていた。文部省への書類作成に際して、新大学の名称を決めなくてはならなくなり、当時、設立に参画していた私達は、新大学の名称をめぐって甲論、乙駁と議論をつくした。その過程で、愛知人文大学という案も出てきた。「人文」という言葉は、以前よりはやっていた、気の利いたものであったが、私が簡単に「愛知大学」というのがよいのではないかと主張すると、それが手っ取りしてよいということで採用された。「愛知大学」と大学名がきまってから、それは「知を愛する」大学ということにもなるので、大学名にふさわしいと言われるようになった。

また、食糧難のときで、体力は極度に落ち、ほとんどの人は栄養失調で、動くのもものうい状態で、視力も低下し、目もかすむといった始末であった。三十年余りもたった今日では想像するのも困難なことだろう。

このような状態の下での、大学の設立運動であったから、並大抵のことではなく、疲れ果てて家に帰ると、着替えもせず、そのまま寝てしまうこともしばしばあった。それは体力の限界を越した日々であって、もう一度やれといわれても、到底できることではない。それを敢えてなさしめたのは、大学設立への不思議な情熱であったであろうか。幸いなことに、豊橋市長を中心とした一部分ではあるが、大学誘致への熱情と、それを拍車、激励した街の一部分の声援があった。これらに私達も勇気づけられていた頃であるから、一年足らずといっても並大抵のことではなかった。今は亡き父が金の工面をしてくれて随分助かった。こうしたことを、もう一度やれといわれてもとてもできることではない。

（五十三年六月二十一日）

五　開校当初の風景

終戦の翌年、昭和二十一年十一月十五日、文部省より愛知大学の設立認可がおりると、大学の予定地だった豊橋第一予備士官学校跡（現在の豊橋本校のあるところ）は、にわかに活気づいてきた。その頃は、まだしきり復員が行われていた頃で、昭和二十二年には、復員船をうたった、「かえり船」とか、「意気消沈の人々の心に、リンゴの歌」などが流れていた。その頃は、また、織田作之助や田村泰次郎などの小説が、虚無感の中にもりと出版されていた。そして、戦争の廃墟から立ちあがるには、まだ混沌状態にあった頃で、豊橋駅や駅から直結する豊橋市の中心街一帯も丸焼けで、黒い残骸を残したままで僅かにバラックが建てられていた程度であった。札木通りあたりの青空市場がにぎわっていたのが印象的であった。

かくて、大学設立の認可は二十一年晩秋の候におり、まず予科を開講し、二十二年四月より本科をも開講し本格的な活動を開始した。当初の大学規模は法経学部、法政科と経済科とそれに予科があった。一学部と予科からなる最少限の大学であったが、「それにひきかえ、教授陣容は発足当初から充実をきわめていたものであった。初代学長は元慶応義塾の塾長（慶応大学総長）をされた林毅陸学長であった。先生は学識高く、人格高潔、温厚な立派な人柄であった。創設間もない大学は財政難で、学長の俸給も安く、本俸僅か一千円以下であった。教授も八百円以下といったところであった。教授陣とは、終戦で解散となった東亜同文書院並びに東亜同文書院大学、京城帝国大学、台北帝国大学等から優秀な学者が参加したため、国立大学にまけないような立派な教授陣容を誇っていた。